

危機体験とスピリチュアリティ

窪 寺 俊 之

【I】はじめに

日本では癌の死亡率が第一になり、毎年約27万人の生命が失われている。癌に伴う疼痛や経済的、家庭的負担は病人には二重三重の苦痛である。

今日、「死」を考えると、「死」という出来事を抽象的に考えることはほとんど意味を持たなくなった。「死ぬこと」あるいは「死に逝く過程」がより具体的、实际的、現実性をもつ問題となっているからである。今日、「死」の出来事は、瞬間的に起きるよりも、持続的、継続的であり、家族の経済や人間関係を含み、社会的制度や価値観を取り込む出来事である。そして、死の問題は究極的には自分で受け止めるしかないという点で実存的でもある。

癌を負った者は、常に「生命の危機」にあると言える。この論文では「危機」の内容を明らかにし、「危機」に対して「スピリチュアリティ」がどのように対応しているかを明らかにしてみたい。「スピリチュアリティ」という人間固有の機能が、危機解決にどのような働きをするのかを明らかにしてみたい。まずはじめに危機とは何かを明らかにし、次に「スピリチュアリティ」とは何かを明らかにする。そのあとで癌を患って闘病生活をし、家族や同僚へ切々とした心情を語っている闘病記を資料を取り上げてみたい。闘病記の中に表現されている「危機意識」と「スピリチュアリティ」を観察しながら、両者の関係を明らかにしてみたい。

【Ⅱ】「危機」の諸定義

危機の定義についてH. W. ストーンは危機には「平常の成長的危機」と「状況的（偶発的）危機」があり、危機発生状況が少なくとも二つに分類できるとしている。⁽¹⁾ 特に平常の成長的危機は誰の人生でも遭遇する危機であり、その危機をどのように対処するかで将来の成長へのきっかけとなるという。ストーンの変えて表現すれば、個人生活や個人の通常のライフサイクルの変化に起因する危機と人生での予想外の出来事や状況変化に起因する危機とがある。前者に属するものとしては、両親の死に遭遇するとか、遠く離れた大学へ入学する為に親のもとを去る若者や、あるいは定年を迎えて社会の第一線から離れるなどの体験が含まれる。しかし後者に属するものとしては、幼い子どもが突然死ぬとか、順調に進んでいた会社が不況の波に襲われて倒産するとかいうことがある。

特に死や死別というテーマが人生の危機として学問的に扱われてきたのは、エリサベス・キューブラー・ロスの「死の瞬間」がきっかけになっており、死という危機に関する研究に道を開いた。⁽²⁾ エリック・リンデマンによれば「危機とは個人や家族にたいして起きてくる出来事、または状況であって、日常での均衡のとれているバランスを崩し、かつそれまでのバランスのとれた状態に戻そうとしても既存の解決法では役立たないような状況を言う」⁽³⁾ このような「危機」理解に立てば、危機解決は既存のバランスの取れた状態に戻ること（回復）である。そして既存の状態への回復こそが危機解決となるとした。

しかし、神学的視点から「危機」を定義している学者たちの中でカール・マイケルソンは危機を信仰の関係で定義しようとしている。⁽⁴⁾ 「危機」は信仰や懐疑に関わる問題であるという。そして「非回避的状況」があり、かつ究極的重要性をもつ「重要な状況」とがある。特にマイケルソンの貢献として評価できるのは危機状況を表層的なレベルから実存的レベルの危機に注目した点である。究極的関心事である生きる意味が問われる危機状況に注目した。

「危機」の中でも特に「自分の死」に直面すると、単なる問題解決の追及に

終わらない。「回避」も、「解決」も、「超克」もできない「自分の死」に襲われて、人は自分に最も深く直面させられるし、自分の罪の問題や死後の問題などにも関心を持ち始める。

チャールズ・ガーキンは基督教の視点から直接「危機」を見ている点で、高く評価されてよい。⁽⁵⁾ ガーキンは危機体験がもたらす問題について「神の存在の有無の問題」「苦難の中での意味の問題」「絶望的状況での希望の土台の問題」「ゆるしの問題」などを取り上げている。そしてガーキンによればこれらの問題は、信仰の問題から離れては解決しないと言う。ガーキンのこのような指摘は死の現実が非常に個人的実存の問題であり、かつ、個人の信仰の問題であり、それゆえに神学的な問題を含んでいるということを述べている訳である。そして神学的に「危機」をガーキンは次のように定義している。「危機とは人が生きる意味とは何かを問い、人間の有限性や限界を問題にし、かつ人間の基本的脆弱さを問題にする状況であるという」⁽⁶⁾ このような理解に立つと、危機状況の解決には、人間の本質論や信仰の問題が関わってくる訳である。人間の知的能力や理解を越えた方からの応答や解決がないと納得のいく解決は有り得なくなる。なぜなら人間の死はしばしば不条理なものであり、自分の死を納得して簡単に受け入れられるようなものではないからである。

しかし日本人を考えると、「神の存在の有無の問題」や「ゆるしの問題」はキリスト教的色彩が強すぎると思える。日本人にはキリスト教信者の様に明確な神概念を持っている者は少ない。むしろ漠然とした偉大な力を感じるというようなものであったりすることが多い。神道や仏教の影響を強く受けた日本人でも、自分から教典を読み信仰に入るものは少なく、その意味では無宗教化した時代であるから、抽象的で曖昧な存在をイメージしか持っていない。そこで、この論文ではむしろキリスト教的枠を外して、日本文化の中で人は危機をどの様に体験しているかを明らかにしてみたい。

【Ⅲ】「スピリチュアリティ」の諸定義

「死、死ぬこと、遺族に関する国際実行委員会の中のスピリチュアルケア実

危機体験とスピリチュアリティ

行委員会」(The Spiritual Care Work Group of the International Work Group on Death, Dying and Bereavement) がまとめた「霊的配慮に関する仮説と原則」(Assumption and Principles of Spiritual Care) の中に「スピリチュアリティとは自己の人生を生きるのに超越的、超感覚的、実存的に生きようとすることであり、また徹底的意味で、人間として人間に関わることである」⁽⁷⁾ としている。この委員会では「スピリチュアリティ」を哲学的、宗教学的、民族学的視点から把握しようとせず、むしろ臨床的視点から見て、現代という無宗教化し、かつ、宗教的多元化した時代の中でスピリチュアリティの意味の重要性を認識している。死に逝く人々やその人々の不安、恐怖に関心を寄せながら、人間を越えたものと人間がどう関わろうとするかに関心を示している。「スピリチュアリティの追及が最も高まるのは死に直面したときである。スピリチュアリティは直接的に、間接的にも色々な方法で現れる。」⁽⁸⁾ として、その具体的方法として、宗教的に非宗教的に、シンボル、儀式、実践、行動、ジェスチャー、芸術品、祈禱、黙禱など多様に現れるとした。⁽⁹⁾

この委員会の委員を務めたジョンDモーガンは、カナダのオンタリオ州ロンドン市にあるキングスカレッジで1968年以来、「死と遺族」のコースを教授してきた。モーガンは哲学的立場に立つが「スピリチュアリティ」を働きとしてとらえて「全く不条理に見える世界に納得できる根拠を見つけ出す働きである」⁽¹⁰⁾ としている。モーガンにとって「スピリチュアリティ」とは「働き」であって、不条理の世界の中に意味を見つけ出すものである。そして、「自分の人生を自ら決定する人間の能力こそ、人間の持つスピリチュアルな性質を最もよく示す例である」⁽¹¹⁾ とも言って、「スピリチュアリティ」が人間を人間として規定する重要な要因であるとしている。

更に、ミズリー州セントルイス市ウェブスター大学教授であるデニス・クラスは「悲嘆解決のスピリチュアルな側面」という論文の中で、死とスピリチュアリティの関連性に注目して、「死は否定できない現実であると同時に死は人間の負った条件の中で不完全性を示すものであり、スピリチュアリティの動機となっている。人間は人生が有限なものであるので無限と繋がろうと懸命に

なるのである」⁽¹²⁾と述べて、人間のもつ不完全性、有限性が無限との繋がりを求めようとする「欲求」となるといい、それを「スピリチュアリティ」と呼んでいる。またクラスは「スピリチュアリティ、プロテスタンティズムと死」という論文の中でスピリチュアリティを宗教心理学的見地から「スピリチュアリティは関係性への気付きであり、特に五感を越えたものとの関係性の気付きである」とその特質を述べている。⁽¹³⁾そして「自我の殻が無くなり、私たちの中にある真理が外側にもあることが解った時に『スピリチュアリティ』を感じる」⁽¹⁴⁾とも述べている。クラスは死に直面した人にスピリチュアリティが大きな慰めとなり助となると言う。またその理由はスピリチュアリティがこの肉体的意識的自己の限度を超越したものと結びつけるものだからであるという。⁽¹⁵⁾人間が死という限界性に直面した時に、人を慰め助けるものがスピリチュアリティであるとスピリチュアリティの機能についても触れている。このスピリチュアリティは有限な自己を超越したものへの認識を開くものだから危機状況である死に強く現れる訳である。人間の限界を打ち破って新たな可能性を開くところに「救い」や「希望」の可能性があるわけである。肉体的には消え去っても、なを未知の世界に自らを開放していくものが「スピリチュアリティ」である。

リチャード・ギルバートも牧師、遺族へのカンセラーとしての働きの中から臨床的視点を持って死を研究してきた人であるが「スピリチュアリティ—勇気、旅、経験」と言う本の中で、「からだ」「心」「霊」の関係を次頁の図1のように示している。⁽¹⁶⁾この図は必ずしも「心」「霊」「感情」を明瞭に定義するものではないように思える。その理由はこの図では「からだ」と「こころ」の間に「感情」が位置しているが、「心」と「霊」との間にも、苦悩、苦悶、驚愕、叫びなどという魂の底からでるスピリチュアルなものがあると思えるからである。拙者も心のもつ「精神的心理的側面」「スピリチュアルな側面」「宗教的側面」についてすでに述べてきた。⁽¹⁷⁾

危機体験とスピリチュアリティ

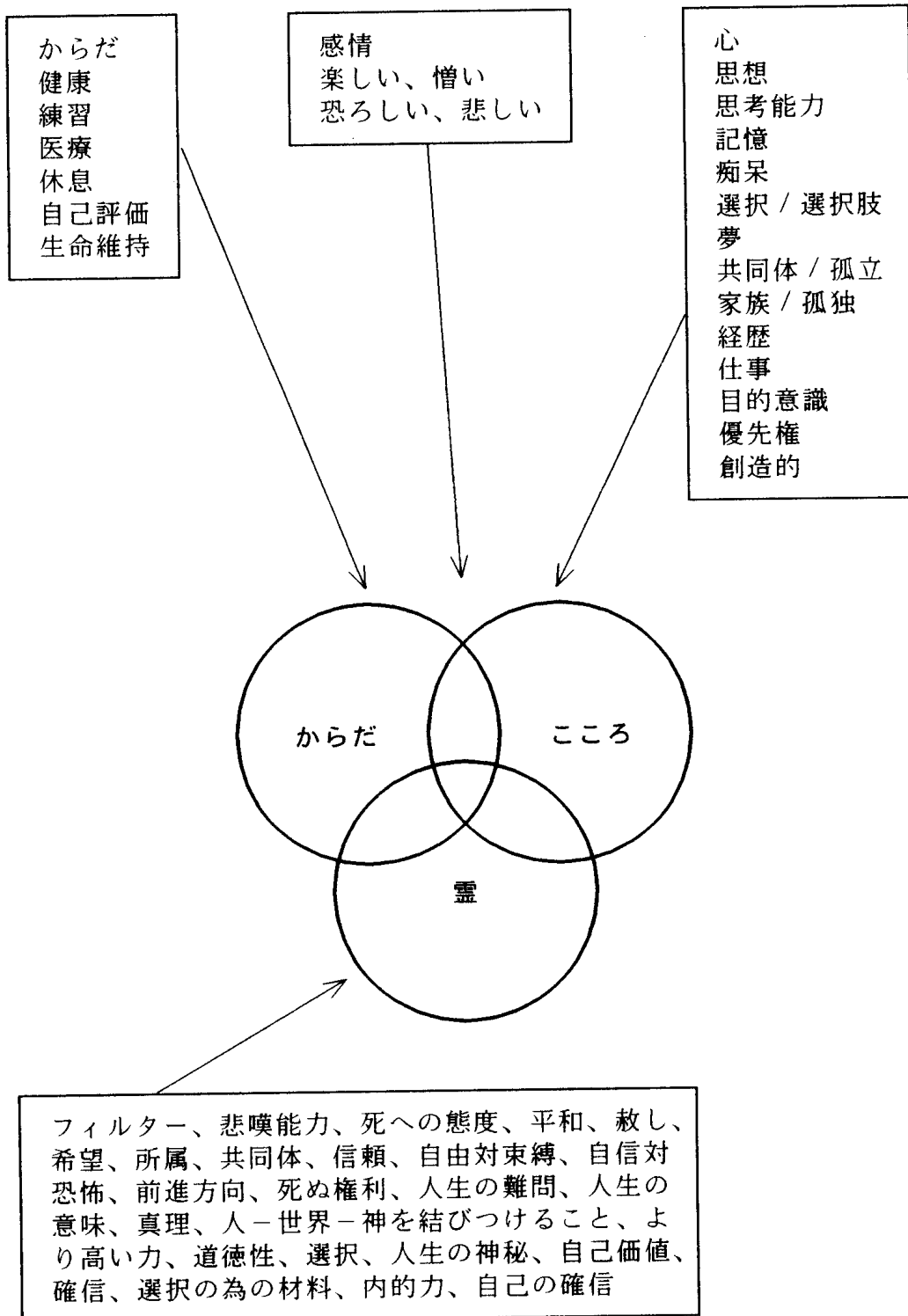


図1 からだ、心、霊の関係

Richard B. Gilbert, 「Spirituality」より引用

更にギルバートはジョージ・フィットらの研究⁽¹⁸⁾に学びつつ「スピリチュアリティ」の四つの同心円的理解を提唱している(図2参照)⁽¹⁹⁾。ギルバートはこの四つの同心円全体を「スピリチュアルなもの」として理解し、四つの関係の破綻が魂の苦痛を生み出していると見ている。ギルバートは四つの関係が以下のような感情を生み出していると述べている。⁽²⁰⁾ それを「霊性のもつ四つの意識レベル」としている。

1 自分自身との関係

(自尊心、目的意識、未解決の感情、罪責感、怒り、遺棄感)

2 他者との関係

(家族、友人、集団対孤立、孤独、未解決の悲嘆)

3 世界との関係

(環境、地球的関心、創造、社会混乱対平和、目的意識、自己価値、必要とされている感覚、職業)

4 自分の神との関係

(神、宇宙、威力、意味深い関係、遺棄感対受容、罪責感とゆるし、不平と安らぎ、絶望と希望、倫理観、自分にとって永遠なもの)

このような四つの関係がスピリチュアリティにはあることが分かり、臨床の場での意味を考えるとその意義は大きい。

危機体験とスピリチュアリティ

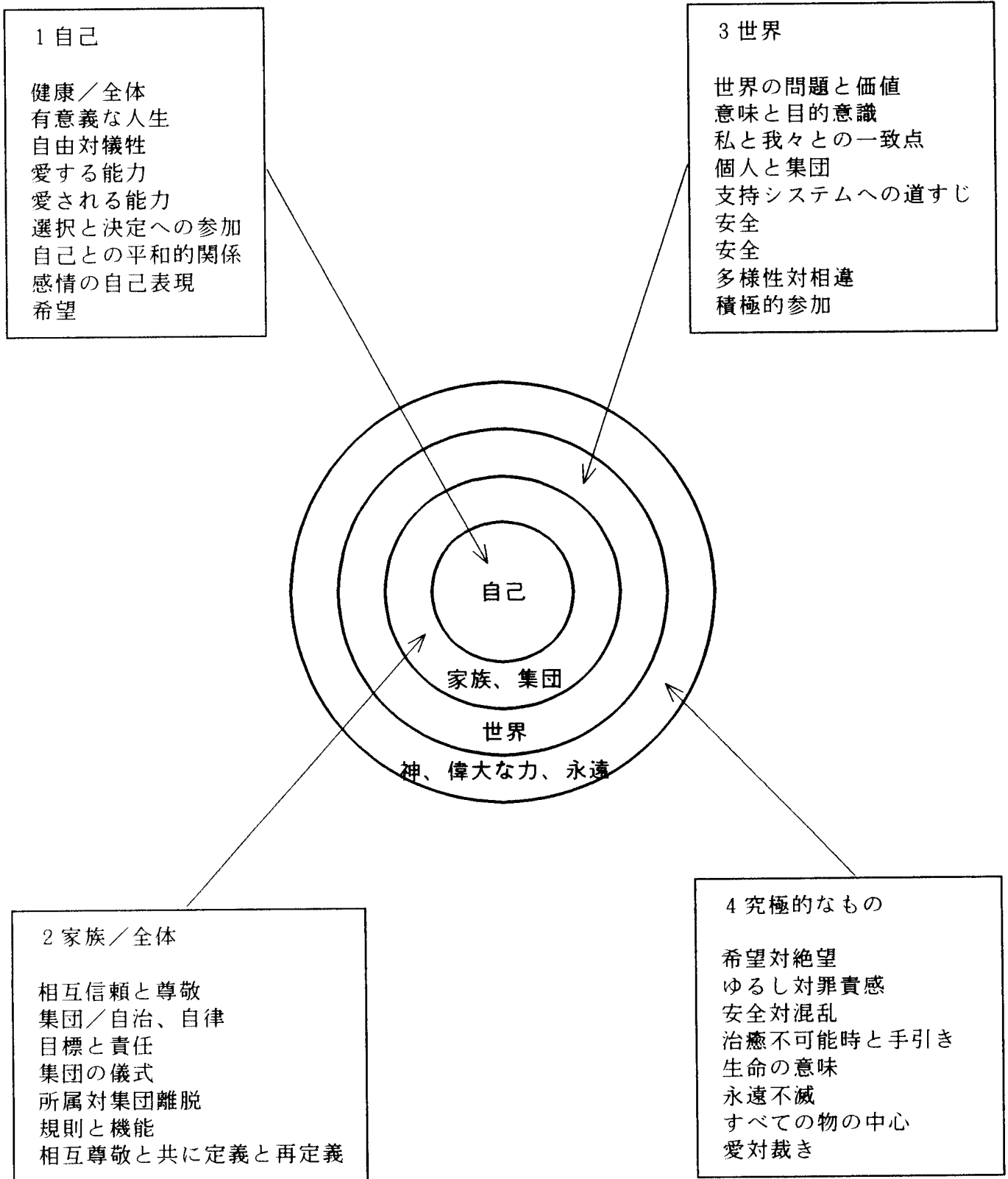


図2 四つの同心円

Robert B. Gilbert, 「Spirituality」より引用

この他、末期患者のスピリチュアリティに関するユニークな研究をした研究者がいる。B スピルカ、J スパングラ、C ネルソンらの三人の研究者は、「ガンをもつ子どもの親」と「ガンをもつ子ども」に牧師、病院付牧師の働き（面接）が患者や家族にどのような影響を与えたかなどを明らかにすることを目的に研究した。⁽²¹⁾

結果として分かったことは、これらの患者は単なる心理学的援助以上に霊的支持を求めていることである。⁽²²⁾ スピルカたちは更にそれぞれの援助がどのように異なるものであるかを明らかにしている。

「心理学的」とは以下のようなものであるとしている

- 1 人間関係に関わる事柄
- 2 悲嘆や喪失の苦痛
- 3 身体的苦痛に耐えること
- 4 非回避的環境の情緒的受け入れ
- 5 人間的レベルに直接関わる事柄

また「霊的」（Spiritual）の定義は以下のようなものである

- 1 人生の究極的意味
- 2 価値
- 3 究極的存在者との関係
- 4 人間の力ではどうすることもできないことを理性化することである

スピルカらの定義からわかることは、心理学的側面は、人間関係、病気が原因で起きる精神的、心理的感情的情緒的動揺などである。それに対して、霊的側面とは人生の究極的意味や価値の問題と究極的存在者との関係と人生の難問の解決などが含まれる。「心理学的」と「霊的」は重なる部分があることを認め、「霊的助けを必要としている人に適切に霊的援助があたえられるのは、心理学的知識や技術が適切に働くときである。」⁽²³⁾ と述べている。

危機体験とスピリチュアリティ

以上、明らかになったのは、死という「人生の危機状況」と「スピリチュアリティ」が密接に関わり、死の不安、恐怖に囚われた末期患者へのケアを考える上で、スピリチュアルケアが重要な役割を持っていることが解る。

【IV】スピリチュアリティとは何か

この小論では以上のことを踏まえて、ここで「スピリチュアリティ」をつぎのように定義したい。⁽²⁴⁾ 人間のスピリチュアリティは二つの極をもち、一方は「超越者への関心」であり、もう一方は「自己の人生への関心」である。危機状況に置かれると人は、「スピリチュアリティ」が覚醒されて、「超越者への関心」と「自己の人生への関心」を強く持ち始め、危機で喪失しかけた自己を保持、回復、成長、確立しようとし、かつ、受け入れるしか仕方がない自己の状況を受け入れる際の「意味付け」にしようとする。この二つのスピリチュアリティの極の内容は次のようである。

A 超越者への関心

- 1 自己の人間存在の限界を越えた超越者、絶対者との関係を意識する
- 2 超越者、絶対者の力、慈悲、愛、意志に依存しようとする
- 3 自己の知的、理性的限界を越えたものからの力、慈悲、愛、意志に頼ることで、自己の危機状況の不安、恐怖、怒り、後悔、苛立ちなどへの解決を見出そうとすること
- 4 人間を越えたものからの庇護、守り、意味付け、励まし、慰めをうること、危機状況にいる自己を受け入れ（受容）しようとする
- 5 超越者が与えた危機の自己への意味を発見する（危機の積極的意味付け）
- 6 超越者の意思、生命、力、愛、慈悲の中にある自己に気付く

B 自己の人生への関心

- 1 危機状況の中の究極的自己を意識する（苦悩する自己の客観視）
- 2 自己の過去、現在、未来を実存的に意識する
- 3 危機の中の自己存在の意味、目的、価値を探究する

- 4 危機の中の自己の存在の意味、目的、価値を見出して励まし、勇気、希望を見つける
- 5 危機にある自己の究極的意味、目的、価値が超越者、絶対者と関わっていることに気付く
- 6 自己存在と超越者とが関わっていることで、自己存在の価値と意味を発見し、魂の平安、喜び、希望、勇気、安心を得る

以上のことを前提にして、スピリチュアリティが日本人の中にどのような形で現れるかを見てみたい。一人のガン患者の闘病記を取り上げて、この患者の危機状況での心のあり方にスピリチュアルなものがどう関係しているかを見てみたい。

【V】資料選択の規準

この闘病記をここで取り上げる理由が幾つかある。

一つは日記執筆者が精神科医で自分の心に起きる精神状況や心理的状况を出来るだけあるがままに書くことを目指して書いていることによる。資料としての正確さ、客観性がこの闘病記にはあると考えた。

二つ目の理由は、この闘病記ははじめから個人的な理由で書かれ、出版するつもりはなかった。出版する意図で書かれたものは、日記者の中に読者が意識されていて、事実が脚色される可能性が強い。執筆意図が個人的なものであることは、内面的に起きている出来事が忠実、正直に書かれていると考えられる。

三つ目の理由は、この闘病記は宗教者や信者によって書かれたものでないことによる。特定の宗教に属していない人によって書かれたものであることによる。「宗教」と「スピリチュアリティ」は相い重なり合う部分があると考えられるので、出来るだけ宗教に関わりのない人が望ましいと考えた。宗教をもたないこの闘病記の中に現れる「スピリチュアリティ」を検証するには適すると思えるからである。

この論文の目的は、宗教とは無関係の人々の中にもスピリチュアリティ（霊

危機体験とスピリチュアリティ

性) が危機によって覚醒され、かつスピリチュアリティによって患者が、生きる目的や希望を発見する助となることを見出したいと願ったからである。

【VI】 自己との葛藤

この論文では特に「人生の危機状況」が人生の受け止め方(受容)に与えた影響について見てみたい。ここで取り上げるケースは、精神科医であったが前立腺ガンの為に死去した、西川喜作の残した「輝け我が命の日々よ」(新潮社)を取り上げる。

西川喜作は昭和5年東京に生まれ、千葉大学医学部を卒業して、慶応義塾大学医学部精神神経科で研修を積み、その後昭和38年、米国のコロンビア大学精神医学研究所に留学、帰国後、国立下総療養所に勤務、また国立千葉病院精神科医長となるが、昭和54年3月発病、昭和56年10月19日、国立千葉病院で死去。

発病以後、西川は多くの友人、知人に手紙を書いたが、発病の年(昭和54年)10月に評論家柳田邦男にも手紙を書いた。柳田が月刊誌「文藝春秋」に書いた「ガン50人の勇気」を読み深く感銘したので、その読後感を伝えたかった。同時に自己紹介を加えて、そこに自分が精神科医であり、前立腺ガンをわずらい睾丸摘出手術をしたことをめんめんと綴った。柳田邦男へのこの手紙がきっかけとなり、柳田は西川喜作としばしば会うことになる。西川はガンとわかって以来、大判の大学ノートに日記を書いていた。そのことを知って柳田は闘病記の出版を勧める。実際に本のかたちになったのは、昭和五十六年十月十八日の夜で柳田邦男と編集者が西川喜作が入院している病院に駆けつけ、西川喜作の手もとに届けた。それは西川喜作が息を引き取る四時間前だった。柳田邦男の言葉に、西川は頷いて応えたが、それが最後であった。

その様な事情の中で書かれ出版されたのが「輝け我が命の日々よ」である。以下、西川喜作に起こった意識、認識の変化を中心に項目を拾い上げていく。()の中の数字は頁数を示している。

〔1〕 生きた証しを残したいとの衝動

昭和54年3月16日（金）20年振りに日記を書き始めた。そして次のように書いている。

三月十六日、金曜日の日記

「何を書き付けなければいけない衝動が急激に湧き起こったのだ。とにかく書かなければ記録しなければ生きている証しが消滅しまいそうだ」（30）

下腹部が膨満しても、尿閉して、排尿しない苦しみをもったのが、昭和54年3月15日の早朝であった。この日は「私にとって永久に忘れられない日となった」（25）と述べているが、その日の心情は激しいものであった。そして次の日から西川は日記を書き始めた。それが3月16日の日記である。

四月三日、火曜の日記に次のようにある。

「昨夜書いた手紙を読み返してみた。いつになく長文の手紙になっている。自分の気持ちを十分に伝えるために長文になってしまったのだ。読み返しながら改めて思った。これからは率直に書こう、と。そして電話で用を足すのはよそう。私の命はそう長くない。一方的かもしれないが、友人たちには手紙という形で私が死んでもあとに残る贈物としたい。」（44）

「生きている証」を残したいという衝動が湧いてきた理由は何だろうか。死に直面させられ、生命の危機に直面させられた人は生命が終焉を迎える前に、自分の生きた証を残して置きたいと願う。それは「自分」が「生きた」ことをいつまでも残したいという「自己証明」と言えるものである。そこでは、自分の生命が肉体としては消滅することを前提としながら、「西川喜作」という特別な人間がこの世に生命を受け、「西川喜作」らしく生き死んだことを後世に残して置きたいと願う。この願望にあるものは「西川喜作」への執着、愛着である。同時に「西川喜作」を限りなく客体化して自分を見つめ直す作業である。だから「西川喜作」へのいとおしさ、思いやり、愛情が働いていて、「あとに残る贈物としたい」と述べているように、「西川喜作」への愛着が自分の存在証明への願望となっている。

十月十四日、日曜日

危機体験とスピリチュアリティ

「私には千春と丈二という二人の息子がいる。しかし息子たちを意識してこの世に残そうとしたわけではない。仕事？誰だって私のやった程度のことはやっているさ。論文実績？みんな取るに足らんものばかりさ。古くなった過去の知識さ。」（84）

ここにも西川は将来に残すものについて思いを述べる。「取るに足りない」と自己評価しているが、しかし、自己の業績が後世に残って欲しいという願望は明らかである。永遠という長さの中では、消え去るものかもしれない。しかし、後世への多少の貢献をしたことが認められたいとの願望は見える。

この生きた証を残したいという衝動は、自分の「存在証明」であって、「西川喜作」にどこまでも執着するところから生まれたものである。そして、現在の西川喜作の生命に執着すればするほど、死によって西川喜作が消滅することに恐怖と口惜しさと苛立ちをもつ。込み上げてくる消滅への恐怖、不安、苛立ち、悔いの解決は、肉体以外のもので残して置くしか無い。「日記」「手紙」「論文」「仕事」が西川喜作が選んだものである。仕事への熱烈な没頭は消滅する肉体に直面しても、残された選択肢に集中的に自己を燃やす姿である。後世に自分の証を残して置きたいというこの様な願望は、西川喜作の心が「永遠」「不滅」に関心を寄せていることを示している。人間存在は滅び、忘れられ、消えていくことに気付けば、いつまでも残るものを残して置きたいと願う。そこには人間存在を越えたものへの関心、興味、願望、希求が生まれてくる。「スピリチュアルなもの」を人が求めている証である。

〔2〕過去の人生の振り返り

三月二十七日、火曜日の日記。

「ほぼガンとわかって入院を控えての旅行はいささか呑気すぎると考えないでもなかった。また妻も出かけることをしぶっていた。しかし、ひょっとするとこれが最後の国外旅行になるかもしれない。遠く日本を離れたところでゆっくり自分のこれまでの人生を振り返ってみたかった。」（40）

過去の人生や経験を振り返ることで、「自分の全体」を自分として把握して

おきたいと願うようである。全体験が自分であると確認しながら自分の人生の総決算をしようとする。

十月十五日、月曜日の日記

「妻と始めて出会ったのは、三十年以上も前のことだ。彼女は女学生で、私は東京府立第三中学（現在の都立両国高校）の生徒だった。植木職人の私の父は敗戦後体調を崩し、寝たり起きたりだった。私は一家のために食糧の買い出しに行かなければならなかった。……郁子が水海道の女学校に通っているのはあとで知った。十七歳の私の目には都会的気品のある少女として映った。黒くて大きな瞳が印象的だった」（85-6）

過去を思い出すと、美しさは一層美しさを増して思い出される。それは過去を受け入れ易くし、かついつまでも残りやすくしているものではないか。

十月十五日の日記の続きに次の様にある

「結婚生活は無一文に近いところからスタートした。当時慶応大学医学部精神神経科教室に入局した。そして昭和三十二年四月、私たちは結婚した。……そんな私たちだったが昭和三十四年には武蔵小金井に小さな家を建てることのできた。それも半分以上は妻が働いた金でできたといってよい。」（87）と述べて、過去を振り返り、妻がどんなに大きな働きと貢献をしてくれたかを素直に述べている。過去を振り返って、自分の人生の総決算をしようとする願望は、妻との関係の総決算へと広がっていく。更に、子どもたち、友人、知人との総決算が始まる。その総決算の中には、健康であるときには素直に感謝できないことでも、死という最終点が決まると「死ぬ」までには、正直に心の気持ちを伝えたいと思う願望が強くなる。

健康な時には、我欲、所有欲、権力欲、名誉欲が強すぎて、自分にも他人にも素直になれない。死に直面して、素直に自分の心と対面すると、確かに妻の働きが結婚生活を支えるに必要不可欠な要因であったことに気付く。このような素直さが、自分の生活を支えているものへの感性と繋がっていく。生活の根源への感性が危機体験には伴うので「スピリチュアリティ」を覚醒する一因となっている。

危機体験とスピリチュアリティ

〔3〕人生に感謝する素直さ

「こんなにやさしい人たちを同僚に持てたことの幸せをつくづく感じた。幾人かの方が涙をみせていた。私もついつい嬉しくて涙を押さえることができなかった。」（104）

死が人を涙もろくするのではない。もう二度と会うことがないことが人を素直にし、今生きていることに充実感を与える。

三月二十三日の日記

「実は私ガンに冒されている身です。いやでも死というものとの対座しなければなりません。そうした時に私が思いますことは、今の妻を得たことが私の人生において大きな財産だったということです。妻と暮らせてよかったとつくづく思っています。……こんな病気になってみて、この妻と一緒にあったことをいまさらながらに感謝しております。」（129）

神経科の看護婦S君の結婚式の祝辞のなかで妻への感謝を述べている。死の現実には西川の心を素直に変え、言葉として感謝の気持ちを表現させる。感謝は、自己受容と他者受容が一緒になったところで起きるのである。人生に感謝する素直さは、自分の人生の背後にあって自分を司っているものへの素直な感謝にも繋がっている。理性、知性、そして合理性や科学性のみに傾倒していた思考が薄れて、感性にたつ判断が重要に思えてくる。ここにも直観や人生全体を重視する「スピリチュアリティ」が見られる。

〔4〕自然の美に素直に感動する心

三月二十七日、火曜日の日記

「とりたてのうにを食べ、その殻を捨てると色とりどりの魚が寄って来る。どこまでも澄み切った海と夥しいほどの魚。それは素晴らしいあるがままの自然の姿だった。……あれから四十年。自然の美しさは私に生への限りない渴望をかきたたせる。死んでたまるか。」（40）

自然の美しさへの感動が西川の生への渴望を掻き立てる。

西川喜作の自然の美しさの感動は単なる美への感動であったとは思えない。

むしろ、自然の中で魚や生き物が遅しく、生き生きと生きて生命を輝かせている姿が西川喜作の生への渴望を掻き立てたのではなかったか。

三月二十九日、木曜日の日記

「草木の一本一本、人々との触れ合いのなかの一言一言に人生の幸せを感じるようにになっている。一期一会の緊張感を知った。」(42)

生命の尊さ、自然のもつ遅しい生命力が非常に貴重に思える瞬間は草木の一本一本と人間が同じ価値を持ち、草木といえども捨て去るものでなく、いとおしく感じられる。

十月十四日、日曜日の日記

「庭に下り、芝生の間にはえている雑草を取る。ゆっくり一本一本引き抜くが、ふと草にも生命があることに気付く。草を抜くのを止めて芝生に横になった。」(84)

ここにも西川喜作の自然の生命力への崇敬の念が見える。雑草にも自然の生命が宿っていることが尊いのだ。

十一月二十日の日記

「帰りの新幹線からの景色が素晴らしかった。澄みきった青空に富士山の姿がえも言えない。妻も連れてきてやればよかった。来年は一緒に来よう。もし再びこれらればの話しだが。」(104)

五月二十二日

「甲斐駒ヶ岳、仙岳、塩見、荒川そして赤石岳と続く山脈は何度みても美しい。山々を眺めているとどうしてこんなに心が和むのか」(142)

ここでは「美しさ」のもつ「魂の癒しの力」にふれている。死と直面して苛立ち不安になった自分の心はいつの間にか固く閉ざされ、緊張し、不安と恐れのかげに閉じ籠もっている。この緊張仕切っている心を自然の大きさと優しさが解放し、元の自己への引き戻してくれるのである。

三月二十九日の日記

「グリーンベルトの桜が立派に育っている。植えてからまだ十年にならないのに、素晴らしい生長ぶりだ。蕾もふくらみ一両日には咲きそうだ。春を感じ

危機体験とスピリチュアリティ

じる」(174)

春を感じるとは、「生命の息吹」を言っている。

海、山、澄みきった青空、庭の芝生、草に触れると、生命力が掻き立てられ、心が和み、生命のあるものへのいとおしさがよみがえって来る。西川にとっては自然にふれることが新しい生命への活力になっている。

このような自然とのふれあいは美しさや生命への感性を蘇らせてくれる。忙しい日常生活では忘れられていた美や生命に心の目が覚醒されていく経験である。このような経験は自然現象の背後の生命や五感だけでは捉えられない真理や愛や永遠などへの関心を喚起するきっかけとなる。「人生の危機」が自然の美や生命の背後にあるものへの感性を刺激し覚醒し、かつ人間の知性、感性を越えたものへの関心（「スピリチュアルなもの」）を広げている。

〔5〕若い頃に出会った自然に再会

三月二十七日、火曜日の日記

「幼い小学生の私はそこで自然の姿を見て育った。そして、いま全身でひたっている南国の自然が、すっかり忘れていたそのことを思い出させてくれた。」(40)

幼い時に自然の中で育ったことが、西川喜作の原体験であり、自分の「心の故郷」になっている。「心の故郷」は心の最も安らぐ場であるだけで為しに、そこで自分自身に自由に振舞える場である。更に、自分の存在の原点にふれる場であり、過去にいた自分に再会できる場である。この原自己との再会こそ、自分を慰め、励まし、死を受け入れる最大の助である。

〔6〕一瞬を精一杯生きようと欲する

三月二十九日、木曜日の日記

「ガンを意識し、生を意識することは私の目を大きく見張らせる。今日を、この今を精一杯生きるんだぞと自分に言いきかせるには効果的だった。」

(42)

スピリチュアリティは実存的側面をもつことをすでに見た。今、ここに生きる生命を精一杯意味あるものとして生きようとするのである。意義ある後悔のない人生を瞬間瞬間に生きることが生を充実させることである。人生の長さよりも「生命の質」に重点を置くとき、瞬間を実体験することが重要になる。瞬間を充実して生きることは無限を体験することになり、永遠的深さをもつ生を実感することになり、超越的、超時間的生を生きることになる。それは「スピリチュアルなもの」を体験することになる。

〔7〕「充実した人生」の願望

四月三日の日記に次のようであるが、翌日の四月四日に前立腺ガンの手術（生検、精嚢の検査、直腸の検査手術）が行われる予定になっていて、予後のことが心配であった。

「十九歳で発病し、二十五歳の若さでなくなった。……松戸君の倍も生きてきた私が二十五歳で亡くなった松戸君に教えられていた。病いに負けず、病いを友としながら、残り少ない人生を見つめ、充実した生を送らねばならない。」（46）

西川には、肉体的病は現実的事実である。前立腺ガンの手術を避けられない。この手術は西川喜作にとって、「死に到るまでの間で最も苦しい時期でした」と「死亡挨拶」（昭和五十六年一月二日）に書いている。しかし、問題は病に負けないで「西川喜作」らしく、充実した悔いのない人生を生きることである。「充実した生」とは人生の時間ではなしに「生命の質」が問題になってくる。それも客観的観念としての生命でなしに、「実存的生命」を言っており、自分が納得できる生命である。それは「一期一会」の人生であり、「悔いのない人生」であり、「自己受容した人生」である。悔いのない意味のある人生を生きようとするところに、「スピリチュアリティ」がある。

〔8〕仕事への情熱の増加

四月十八日－入院三日目

危機体験とスピリチュアリティ

「ガンだとしたら患部を大きく切り、人工肛門、人工膀胱をぶら下げて生活するのだろうか。それも致し方あるまい。そうやってでもあと一年、いや二年を生きたい。そして為せるだけの仕事をなしとげたい。」（51）

精神科医としての仕事に打ち込んでいた。肉体的状況が悪くなっても、精神科医としての勤めをはたせるなら、他のものを犠牲にしても（人工肛門、人工膀胱など）、我慢して、仕事をし続けたいと激しい情熱を表している。ここで「精神科医としての自分」が強く意識されている。「精神科医としての自分」が機能をはたすところに生きる意味や価値を認めている姿が見える。この様な受けとめ方こそ「スピリチュアリティ」である。

〔9〕自分の愚かさへの後悔

「医師たる自分が自らのガンの発見をここまで遅延させてしまったとは。私は自身の愚かさを恥じた。それと同時に目の前が暗くなった」（52）

医者でありながら、自分の病気に気付かなかったことへの後悔が見える。

このような自分の行為、生き方への反省、後悔が苦難に陥った人たちには見える。医者であるものが自分のガンの発見を見過ごしたことの悔恨は強い。この様な自覚は一方で絶対的間違いのないもの、無限に正しいもの、後悔や悔いのないものへの希求のきっかけとなる。自分が絶対的に正しいと自認しているときには、自分以外に絶対的正しさを求める必要はない。自己の絶対性の崩壊が絶対者や絶対的正義への希求と繋がるのである。ここに「スピリチュアリティ」の萌芽がある。

〔10〕自分の人生をいとおしく思う感情

四月二十三日、月曜日の日記

「夜、なかなか寝つかれなかった。ガンだとわかっているのに明日の症例検討のことが気になる……病いに対する不安が、自分の人生をかってないほどいとおしくさせている。」（54）

仕事への意欲があり、十分な能力をもち、よい環境が与えられている自分が

ガンに冒され、死の不安に怯えている姿に、西川は心を痛み、可哀相だ、痛々しい、不憫であると自分自身に感じたのである。そして、ガンに冒されて、死に直面している自分自身の存在が非常に大切に受けとれたのである。この「いとおしさ」には弱さや滅びへの共感が深く根底に横たわっている。同時に、ガンに冒されている肉体が健康になってくれることを希望する祈りがある。この不可能な事柄（死の現実）を可能にしたい（祈り）という激しい痛みが西川喜作のなかにある。この不可能を可能にしたいという願望の中に、超能力、超自然を求める「スピリチュアリティ」の萌芽が見える。

[11] 他の患者の痛みへの共感

四月二十七日の日記

「この医療施設で最先端の治療を受けられることは大きな喜びである。同時に責任を感じる。私は生きなければならない。サイクロトロン照射の副作用に負けてなどいられないという思いを強くした。一方で、私の転院のために入院を遅らされた人のことを思わずにはいられなかった。」(57)

同じような病気をもって苦しむ人たちの苦痛に共感しつつ、サイクロトロン照射を受けられる自分の幸運に感謝する。しかし、感謝だけでは終わらない。最先端の医療を受けれたものとして、生きて生還し、同じ病気を持つ者たちへの希望を実現させなくてはならない。サイクロトロン照射治療に期待している人たちに治療効果を示す責任があると感じたという。「同時に責任を感じる。私たちは生きなければならない」と強い決意を述べている。この決意は西川喜作の存在目的が治療結果を出すことであり、生き続けることであり、同じ病いを持つ人たちに希望を与えることであるとの意識が働いている。西川喜作の生の意味は個人的期待の枠を越えて同じ病いに苦しむ人たちの共通の希望となり、その希望の実現が今強く意識されている。西川喜作の個人的期待や希望の背後にあるもっと大きな集団の期待、願望、希望の実現への努力が生きる目的となっている。このような自己を越えたものへの意識の覚醒が「スピリチュアリティ」である。

危機体験とスピリチュアリティ

[12] 死後の準備

四月二十七日の日記

「墓地は静かな丘の上であって、周囲はこんもりした森に囲まれていた。眠るにはいい場所だ、と私には思えた。だが、家に戻っても妻には墓地を見てきたことは黙っていた。」 (58)

多くの患者は死後の準備を闘病中に始めている。自分の生存中に厄介な問題を片付けて置きたいとの願いが強い。

十一月二十五日の日記

「私としては静かな森に囲まれたあの墓地は何かしら安らぎの場がありそうに思えたのだ。それよりも何よりも、早く自分の眠る墓地を決めておきたかった。墓地ができたなら私の死後友人、知人へ送るつもり挨拶の手紙を書くつもりでいた。」 (107)

「自分の眠る墓地」を決めることで、自分の意志と願望を実現できる。死後、家族に墓の選定の負担を負わせないで済むという家族への配慮が見える。また霊魂不滅の考え方があることも考えられる。

「私としては……あの墓地に何かしら安らぎの場がありそうに思えた」と述べているが、墓地に入るのは死後である。死んだ者には意識がないから「安らぎの場」であろうが、そうでないかは本来問題ではない筈である。しかし、西川喜作の現在の意識は、死んでからも意識があるのかもしれないというものである。死んだ者にも「安らぎの場」が欲しいのである。この西川喜作のことは、今生きている人間がいかに死後の状態に関心を示しているかを明らかにしている。人はこのように死後のことに関心をもつ「スピリチュアル」な存在である。

[13] 「今の私」の視点

四月二十九日、日曜日の日記

「急に映画が見たくなって妻を誘い、日比谷の映画街に出かけた。『エーゲ海に捧ぐ』を見る。美しい画面もあったが、いまの私には何ひとつとして感

動するものがなかった」(59)

「今の私」は死に直面し、死の不安と恐怖に怯えている私である。この映画はそんな私に少しも慰めにも励ましにもならなかったという。この西川のいう「映像的美しさ」が死の不安や恐怖を取り除くことは十分でないことを示している。自然の美しさが西川の心を鎮め、和らげたのとは非常に対称的である。そして、その訳は自然の生命力、優しさ、偉大さが鑑賞した映画にはなかったのかもしれない。この「今の私」という限定した自己理解はそれまでの西川喜作にはなかったものと思える。「今の私」という危機意識を伴う意識こそ普段にはないある特定のものへの問題意識や感受性を引き起こさせるものである。

「今の私」という狭い限定された自意識から見る外界は特殊なものが強烈に見えてくる。それは「生命力」「美しさ」「優しさ」「永遠に続くもの」「超越的なもの」など「スピリチュアリティ」が問題にするものである。

[14] 苦難の意義

五月一日、火曜日の日記

「照射量の多寡については素人の私には何とも判断できない。一日も早く社会復帰するためには苦しい副作用にも耐えなければならない、そう覚悟していた。」(60)

一日も早く社会復帰するための苦難、苦痛ならば、耐えなければならない。耐えることに意味がある。

死に直面したものは、その苦難、苦痛に耐えるための力を与える苦難の意味を持ちたいと願う。ここにも苦難の中での生きる意味を求める「スピリチュアリティ」が見える。

[15] 「生きがい」の探究

五月一日、火曜日の日記

「バーチ牧師の置いていってくれた三浦綾子の『塩狩峠』はその夜のうちに読み通してしまった。生きる勇気というか、生き甲斐というか、熱いものが

危機体験とスピリチュアリティ

湧き上がってくる思いがした。」(62)

西川喜作は「塩狩峠」を読み、いたく感動した。西川は登場人物の「生きる勇氣」「生き甲斐」に感動したわけで、感動した理由は西川自身がそれを求めていたからである。

苦難の真ん中に置かれると、もがき苦しみ、自分を支えてくれるもの、励ましてくれるものを求める。外部からの「希望」や「助け」を求める。同時に内部から湧き出る力も必要である。この内部から湧き上がる力は「生きがいの発見」「生きる意味、目的、価値」の発見から生じてくる。ここに「スピリチュアリティ」がある。

[16] 自分人間としての脆さへの発見、認識（参照9）

五月十七日、木曜日の日記

「朝からつまらぬことで看護婦に腹を立ててしまう。……やっぱり私もありふれたガン患者なのだ」(64)

精神科医としてガンと闘う積りでいた西川喜作は自分の人間的脆さを目の当たりにする。精神科医としての知識、訓練が自分のガンとの闘いに役立つと考えていた西川にとって、つまらぬことで看護婦に腹を立てたことは、自信喪失につながったと想像出来る。ガンという病気がいかに肉体的、精神的に患者を苦しめるかの発見であり、かつ、明確な理由なしで腹を立てたことを悔いている。いや自己抑制のきかない脆い自己に気付いたのである。そしてこの自己抑制のきかない脆い自己発見を支え生かすものとして、天来の慰めや希望を求めるところに「スピリチュアリティ」がある。

[17] 視点の転換

六月二十日、水曜日の日記

「病気を機に生き方、人生の目的を考えられるし、真の幸福についても考える時間があるのではないかとあった。まったくSさんのいうとおりだった」

(73)

病気をして失ったものは多い。しかし、視点を変えるならば得られるものも多いと示される。病を負って人生の生き方、目的、真の幸福について考えさせられる利点があったのだ。

病気になって困ったという視点ではなく、病気が与えてくれる新しい視点に立つことが教えられる。病気になると視点は一点に固着しやすい。Sさんの言葉は視点を変換することを示されたことで意義は大きい。それは超越者や絶対者の視点から自分を見直す「きっかけ」を与えてくれたからである。そのような視点変換は「超越的存在への関心」を開くものである。「スピリチュアリティ」への追及をもたらすものである。

六月二十三日、土曜日の日記

「講義を始めてみると肉体的には疲れるが、若い学生たちに接することで心がはずんだ。女性たちの若々しい反応は、私に刺激を与えてくれる。彼女たちの生命の躍動感のようなものを感じ、まだ死んではない、私の生理は老化しきっていないのだと、あらためて思い直した。」(76)

西川は若い学生に刺激されて躍動する自分の中にある若さに気付いている。自己の中に宿っている「この若さ」に喜びを見つけている。

三月二十九日の日記

「患者が息を引き取る最後の一分、一秒まで救命、延命をはかることに全力を尽くすことが医療者の倫理であった。死んでゆく人のケアについては目を向けようとはしなかった。ところが、私は自分の死が確実に近いことを知ってからこれらのことに疑問を持ち始めた。そして、『死の医学』について考え始めたのだった。」(175)

死に直面することで、救命、延命から「ケア」の医学への目標があたえられている。この様な視点の転換によって新しい世界、新しい生きがいの発見がもたらされる。この様な苦難の中での生きる意味や目的の発見は「スピリチュアリティ」がもたらすものである。

危機体験とスピリチュアリティ

[18] 今を生きる喜びに目覚める

十月十四日、日曜日の日記

「私はいま、生きることの素晴らしさを感謝している。いままで私には何故、この素晴らしさを感じとれなかったのか」（84）

生きることが、これほどまでに素晴らしいものと感じられたことはなかった。社会的責任、義務感、生活の糧の為に働き続けてきたのと違って、初めて、一瞬一瞬を味わいながら自分の時間として体験することができる。今、西川は病を負うことで、却って自分を取り戻し、自分の時間を実存的に生き始める。その一瞬一瞬は物理的時間として体験することではない。むしろ、一瞬一瞬を内的に体験することで、西川喜作にとって時間をもつ意味が重くなる。一瞬ごとが実存的体験である。一瞬は永遠的意味をもってくる。無限に深い意味をもつという意味で「スピリチュアルな体験」である。

[19] 手紙に自己を託す

十月十八日の日記

「病気になってからなるべく手紙を書くことに心がけてはいたが、相手は友人、知人だった。まったく未知の人に私の方から手紙を書くのは始めてだった。それにしてもつい先日も友人とはいっても十年も会っていないなだいなだに手紙を書いたばかりである。私は、手紙を書くことのなかになにかを求めている。」（90）

多くの末期患者は元気なうちに別れの手紙を書こうとする。それまで音信不通になっていた人にも、別れのあいさつをしておこうとする。別れには「あいさつ」が伴う文化の中では、別れのあいさつは文化的礼儀の意味がある。しかし礼儀だけではない。礼儀を重んじることで患者自身の人格性を示すことも一つの理由である。手紙を書くことで、受けとり手と患者自身とのつながりの深さを現わそうとする。患者にとって重要なのは、この患者と手紙の受けとり手との人間関係のもつ意味である。この人間関係こそは、いつまでも残るものであり、患者の死後にも残っていく。有限な存在であり、限りある生を生きる患者

にとって、いつまでも残る自己存在の証を残しておきたい。手紙という手段を通して受けとり手との人間関係を確かめ、かつ確かなものとして確保しておくことが患者が出来ることである。そしてそれが、今、生きている意味につながっていく。その意味でここにも患者の「スピリチュアリティ」が顕現している。

[20] 新しい使命、任務に目覚める

十月二十二日

「彼女が最後にいった言葉が強く印象に残った。『ガンになった精神科医の私たちがいったい何を苦しみ、何を考え、何を悟り、何を目指し、患者にどう接し、患者とどう生きてゆくか、自分自身をどう生かすか。私たちは生き抜いてこれらのことについてなにかを書かねばなりません。』」 (92)

ガンにかかった精神科医として出来ることは何か。精神科医だからこそ、できることは何か。それはガン患者の気持ち、願いを書き留めておくことである。そして、それが今の自分のできることであり、かつ責任であると受け止めている。精神科医だからこそ出来ることを強く意識している。そこには「精神科医」、「ガン患者」という条件を負った「わたし」にしか出来ない使命がある。このような意識は苦難の中にある自分の生きる目的、意識を鮮明に意識さるものであって、「スピリチュアリティ」の覚醒といえる。

[21] 自分の人生を意味付け

十月二十三日の日記

「ふと医学生時代のことが思い出されてきた。医学生の私は外科医を目指していた。精神科医になることなどは考えてもいなかった。……四年生の夏に信州伊奈の長野県立阿南病院へ実習に行ったことがさらに決定的要因となった。……伊奈の山村で人々のひどい健康状態と衛生環境をまのあたりにして、公衆衛生あるいは予防衛生の方面に進みたいと考えた。……翌年卒業してすぐ再び伊奈の山村にある組合立健康保健病院に七カ月ばかり行った。その病院で私は医師としての基本的な在り方を実地に学んだような気がする。

危機体験とスピリチュアリティ

これは決して教室では学べない性質のものだった。」(94-95)

医学生として、伊奈での勤務は、外科志望から精神科志望へと変える動機になった。その経験が西川の生涯を決定づけるものとなったのであるが、それは間違いでは無かった。むしろ幸いをもたらせてくれるもので後悔がない。

[22] 患者を診ることに生きがい、生きる勇気をもつ

十月二十三日の日記

「だが出勤せず家に閉じこもっているのは辛い。出勤して患者を診察し、書物や書類に接している方が私には楽しかった。単なる気晴らしということではなく、患者に接すると、勇気が湧いてくるのだった」(97)

「家に閉じこもっているのは辛い」といい「出勤して患者を診察し、書物や書類に接している方が私には楽しかった」といわせた理由は何か。出勤せず家に閉じこもっている西川喜作の頭は自分の病気のこと、死のことが占領したに違いない。出勤し診察することで病気を忘れ、死に悩むことが少なくなる。その意味では「出勤」や「診察」は一種の現実逃避である。しかし、それだけではない。患者を診察し書類に接していることは、社会的価値を失いかけている自分を取り戻す方法である。無価値でない自分を再確認したのではないか。また更に、医師として患者を診ることは人の役にたつことである。人間は他者の為に役立つことで生きがいを持つものである。「やり甲斐がある」(十二月六日)と述べていることも同じ心理を述べたものである。

十二月六日の日記

「再び勤め始める。患者を診察できるのが、こんなに嬉しく、こんなにやり甲斐があるとはと、今さらながらに思いをあらたにする」(111)

精神科医としての仕事をすることの喜びに加えて、病を負いつつ自分の人生を精一杯生きる患者に接することで、西川自身が慰められ、励まされたのではないか。更に、ガンに冒されている肉体でありながら、尚、人(患者)の為に何かができることの幸いさに感激していたに違いない。生きていることの意義と価値を実感させたに違いない。すなわち次のふたつの事が含まれる。

- 1 病を負いつつ精一杯生きる患者に慰められ励まされる（患者からの慰め）
- 2 精神科医として無力化していく自分にもなお患者の為に出来ることがある（自己存在の意味、価値の確認）を再確認させる。

「診察できるのが、こんなに嬉しく、こんなにやり甲斐があるとは」という西川喜作のことばには喜びの実感がある。病む人はしばしば自分の存在の意味や価値を失い、自己喪失感、自己存在の目的や意味の喪失という危機を体験する。西川喜作は病を負いつつ、なお生きて診察しながら生きる目的、意義をかみしめている。ここにも「スピリチュアリティ」が明らかに見える。

[23] 明確化する使命意識

二月二十三日の日記

「死の心理、ガン患者の不安、死にゆく人の看護。そして医療のあり方。どれも関心を抱き始めているテーマであるが、大問題すぎる。……ガン患者として精神科医として日頃思っていること、感じていることを率直に話すことにした」（121）

市立病院の看護研究会と看護学生への講演内容を述べているものである。ガンを負い死に直面している西川喜作は今、少なくとも自分を実存的に感じている。自分がガン患者であること、そして精神科医であること。ガン患者であり、精神科医である自分に出来ることを実存的に意識している。

四月五日の日記

「ロビンソン夫人にできて私にできないことはない。死を恐れず限りある私の人生を妻と共にさらに充実させる責任があるのだ。」（135）

ここでは新しい「責任」の発見を語っている。人がやったことを自分もやってみる。妻との共同作業が自分の責任だと意識した。

「医師にしろ看護婦にしろ、患者を治してやるのではなく、生物としての治療過程と死の過程をよく見きわめ、病を乗り越え、病を友とする気持を患者にもたせることができる様に努力し協力しあっていかなければならない」（136）

危機体験とスピリチュアリティ

ここには、医師の役割（務め、責任、使命）への強い意識が鮮明にされている。患者と努力し協力するという西川の気持ちは、自分が患者になってみて始めて切実にわかったことである。患者の権利や意見に耳をかたむけなければならないというのではない。更に一步踏み込んで、患者の苦しみを医師が共に負う必要を述べている。ここには、患者の極限状況を生きた者しか発言できない、患者の苦悩が滲みでている。そして死に直面することでこの役割、責任感の意識は明確化され、意識化され、内在化されている。

西川喜作の中で起きている精神科医であり、ガン患者である者の使命感、責任感の意識が広がっていく。西川喜作個人への自分の使命、責任から始めて、ここでは妻への責任、そして、患者への責任と広がりを見せていき、使命感の意識の強さが大きくなっている。死を意識しながら、現在の生命の中に自分の存在意味を認識するところに「スピリチュアリティ」がある。

[24] 死の解脱への開眼

四月五日の日記

恩師から貰った本について「一冊の論文を手渡して下さった。『健康と宗教』と題の付けられたその論文には、Spiritual Well-being という副題がつけられていた。私は家に戻ると早速この論文を読ませてもらった。『死の解脱』のために医学が人を医する学であるべきだという教授の説に、私も同意見だった。そして教授の『死の解脱』が宗教の終極の目的であり、しかも医学の対象ともなるべきであるという学説にはあらためて感動した」（132）

信仰心のない西川にとって、ここには宗教への関心が明らかにある。宗教の必要性を認め、死の解脱への援助を宗教に期待しているのが見える。それは、死に直面した者の心を明らかに反映していると見て良い。ここにも「スピリチュアリティ」が見える。

[25] 甘えと拒絶の混乱

四月五日から五月十七日の間の日記（日の記述がない）

「妻があれこれと世話をやいてくれるのが、いちいち気に入らない。それでいて、放っておかれると、無性にかまってもらいたくなる。甘えと、それを拒絶する心が入り混じって入る。……素直に自分の気持ちを妻に向かって明かせばいいことは、重々分かっている。だが言い出せない。言い出さずとも妻の方でわかってくれる、察してくれるはずだと甘えていた。」(133)

ガンに冒された肉体的苦痛と怒り、死の恐怖、苛立ち、不安の中で、西川は心理的動揺を経験する。精神的に自立し、他者への配慮が出来る筈の自分が、現実には、妻に甘え、過度に期待を要求し、孤独と寂しさを紛らわせようと言葉にならない苛立ちを感じている。過度の依存心、依頼心、期待に縛られて、妻への素直さを失っている自分に失望している。このような過度の依存心、依頼心、期待の背後には、自分を甘やかせてくれる「より大きなもの」への希求があると見てよい。そして、より大きなもの、超越的なもの、自分を越えたものを求めようとする「スピリチュアリティ」に繋がっている。

[26] 励ましへの願望、飢え乾き

「妻との間に沈黙がちな日が続き、いっそのこと家を飛び出そうかとさえ思い、つい口走ってしまった。妻は泣き出した。そして妻もしばらく別れていようかともらした。……家を出るなどと口に出してみても、私には行く場所がなかった。……ある日妻は堪りかねたように言った。『あなたは精神科のお医者さんでしょう?』妻の言うとおりで。しかし私にはどう返事をしてよいかわからなかった。『どなたかに診ていただいたら……』と妻は泣き出した。私もつられて泣いてしまった。そんな折に見たテレビのドキュメンタリー番組が私をこの精神的煉獄から解放してくれた。……一人のガン患者の死に到るまでの記録としてでなく、死を前にして懸命に生きようと努力した一人の女性の記録として、私はいたく感動させられた。」(133-4)

夫婦の危機にあって、「精神的煉獄」の状況を救ったのは、一人のガン患者の女性の懸命に生きようとする姿との出会いであった。妻が嫌いなのではない。妻を愛していないのではない。妻に感謝しているのに、気まずさ、苛立ちが先

危機体験とスピリチュアリティ

に起きて、妻にきつくあたる自分を持て余している。精神科医として人の心が分かって良いはずの自分が、精神科医に見てもらわねばならぬ程に弱り、病んでいる。「自尊心が深く傷付いた」状態である。このような折にテレビのドキュメンタリー番組を見ていたと感動した。自分を支えるものを見つけようとしていた折に、力強く生きたガン患者の生き方に出合って激しく共鳴したことは明らかである。「私はいたく感動させられた」とある。ここに働いている自分を支えるための確かなものへの願望が「スピリチュアリティ」への願望でもある。「スピリチュアリティ」は自分を支えるものを人間の能力、知性、理性を越えたものに求めることである。

[27] 魂の故郷へ再訪

五月十七日、土曜日の日記

「朝八時に家を出る。車にはセーター二枚、ジャケット、コート、手袋、軽食品を積み込んだ。私は一人で旅に出るのだ。目的地は上高地。……学生時代、山岳部に入っていた私は毎シーズン上高地に出かけた。……中学に入ると山岳部に入って丹沢などにも行くようになった。……私が十八歳のときだった。それ以来、毎年登った。後立山から剣岳への二度アタックした。……医学部二年生のとき、高瀬川から針ノ木岳へ登り、一週間近い縦走の後、槍ヶ岳から上高地へと下ったことがある。」(136-138)

体力的に衰えていく中で、一人の旅に出た。西川は自然に特別の愛着を持っていた様だ。しかし、死という危機の接近を身を感じた中でのこの旅行は単なる趣味や道楽以上のものようである。それは「自己確認」への旅であったと言える。死を間近にして、自分が若いとき以来親しみ愛し、励まされて来た自然にもう一度ふれて、自己を確認したかったのではないか。自然との触れ合う中で体験して来た喜びと同じ「自分自身」と出会うことである。中学時代、大学時代と山を愛し登山し、そこで内なる自分（魂）に出会って来た。西川喜作にとっての山は内なる自分（魂）との出会う場であった。人はこの自分自身と出会うことを追い求めている。西川喜作は魂の底から自分を育て、慰め、励ま

してくれた自然にもう一度会って、弱り果てた自分の中に、尚「内なる自分の生命」に再会したかったのではないか。「スピリチュアリティ」とは自分の究極的生命を見つけ出すことで自分を生きることである。

五月二十二日、木曜日の日記

「浜松で開かれる学会に出席するついでに伊那をたずねることを思い立つ。

伊那は私にとっては、第二の故郷ともいえる。……伊那との出会いは昭和二十九年、医学部四年の長野県立阿南病院での夏期実習に始まる。」(140)

ここでは、「第二の故郷」と言っているように、西川喜作の心(魂、内的自己)は伊那で生まれ、育ち、生長していた。それ程に大きな精神的、人格形成的影響を受けていたので、弱りつつある自分、砕けそうになる自分、自分でなくなっている自分を「心の生まれ故郷」に再度置いてみて自分を取り戻したいと願ったのではないか。

ここにもスピリチュアリティの「内的自己」という側面が強く働いている。人生を探究し自己のアイデンティティーを求めて若い時に出会った「山」は「自己発見」「自己生長」の場である。ガンを負って精神的に崩れ勝ちになる自分を負いながら、自己の回復、自己確認を強く求めている。ここにはスピリチュアリティのもつ両極面が見える。つまり、超越者を求め自己保持しようとする願望と内的自己を探求しながら支持しようとする願望である。西川喜作での「山」は、「スピリチュアリティ」願望が明らかに姿を表している。

[28] 共感する心を持つ

「このミュージカルからコロンビア大学時代の恩師ロイジン教授を思い出す。ロシア革命が起こったとき、教授はまだ幼なかった。ロシアを脱出する途中で両親を亡くされた。教授は一人でイタリアに逃げのび、そこで、大学をおえた。ところが第二次大戦が始まるやこんどはナチスに追われてアルゼンチンに逃げなければならなかった。この身の上話をきいたのは、教授の山荘に招かれた折のことである。教授は愛用のバイオリンを弾いて下さり、涙ながらに語られたのだ。希望にあふれ、人生の最盛期にいた私は、おそらく、教

危機体験とスピリチュアリティ

授の真の苦しきには思いが到らなかった。もしかなくことなら、もう一度教授に会い、もう一度この悲惨な体験をききたい。今の私なら教授の悲しみを共にすることができるような気がする。」（147）

恩師ロイジン教授の境遇が、今、再び思い出されてくる。「今の私なら教授の悲しみを共にすることができる」という言葉には実感が在る。この共感、実は恩師への慰めだけでなしに、病を負っている西川自身の為のものである。苦しんだ恩師がいることで一人苦しむ西川の心を支えてくれるものとなる。西川のみならず、死に直面して苦しむ人達は、しばしば苦境の中から同じ境遇に置かれた人々を思い出してくる。それは一人苦しんでいるのではないことを自分に言い聞かせる為のものではないか。

自分がガンに冒されてみて、恩師の人生が重なってくる。精神科医としての恩師というよりも、人生を悩み苦しんで生きた人としての認識に変わっていく。コロンビア大学教授として精神科医としての業績など問題にならない。負わされた人生の苦境を懸命に闘ってきた人に関心の中心がある。負わされた人生をいかに生きたのか、何が支えになったのか、何を望んで生きたのか。そこを聞いてみたかったに違いない。それが西川喜作を支え生かすものと考えたに違いない。それは人生の意味や目的への問いであり、超越者、絶対者への関心がその背後にあり、それは「スピリチュアリティ」の問題である。

[29] 遺言状（死亡挨拶）

一月二日の日記

この日記には死の迫ったことを感じさせるところが強く現れている。

「ガンの宣告を受けて2度目の昭和五十六年正月。正月はとくに死の影が濃く感じられる。今年は遺言のつもりで死亡の挨拶状を書いてみる。」（158）と述べて、挨拶状の目的を書いているが、その中には以下のような意識が鮮明に現われている。

1 「あの世」への意識

「この度命運も尽き、あの世に移り住みます」（159）

「あの世に渡ってからお送りさせていただくことになるでしょう」 (159)

「どうかあの世にお越しになってから……」 (160)

「お先に失礼することになります」 (158)

「この辺でおいとまするのは……」 (159)

「このお便りは小生の旅立ちのご挨拶のつもりです……」 (159)

2 「あの世はみんなが行く所」意識

「一足お先に失礼することになりました」 (158)

誰もが行くが自分は一足さきに逝くのだと解釈している

3 「あの世にいく時期がある」意識

「人生五十年とはよく言ったもので、小生もその年齢になったわけです。人はそれぞれ考えも違います。寿命も延びた現代では、まだ早すぎるとお思いになる方がおられるかもしれません。しかし、小生としては十分に人を愛し時には争い、波乱は多くとも悔いのない人生を送れたと思っております。」

(159)

死ぬ時期があって、早過ぎたり遅すぎたりすると考えている。

私の場合は多少早すぎるかもしれないが、自分としては悔いのない人生だったと受け止めている。

4 「あの世での再会」意識

「ご批判はどうかあの世にお越しになってから小生に直接お申し越し下さるようお願い致します」 (160)

西川の言葉には、「あの世」で再会できると信じているようだ。再会は、「この世」での面接と同じように会い、互いに言葉をかわせると意識しているようだ。非常に人間的、この世的色彩の強い「あの世」観である。

5 「あの世とこの世との断絶」意識

「お会いしたい人にはだいたいお会いでき、心の文を通わせることができましたので、思い残すことはありません。ひょっとして皆様方のなかにももっと会いたいと思われる方がございましたら人懐かしがりやで、話し好きの小生ですから、どうぞ現住所までお越しになってください」 (160)

危機体験とスピリチュアリティ

あの世に行くとは再び戻る可能性はない。

二つの世の間には断絶があると意識している。だから、これが最後の面会になるのが口惜しい。

6 「あの世への『旅立ち』」意識

「しかしこの度命運も尽き、あの世に移り住みます」（159）

「このお便りは小生の旅立ちのご挨拶のつもりですが」（159）

「この辺でおいとまするのは身の程に適した神の摂理と納得しているつもりです」（159）

死を旅立ちとして理解する。休息、安らぎ、極楽浄土、天国などとは違う。旅は続けられていく。自分の足で歩きつづける。死は終点ではない。死の先に最終的終着地があるとの意識である。ここにも「スピリチュアリティ」が見られる。

7 「神の摂理」理解

「この辺でおいとまするのは身の程に適した神の摂理と納得しているつもりです。」（159）

と述べているが、ここで「神の摂理」として自分の死を受け止めようとするのは何故か。

(a)

西川にとって死ぬのは口惜しい。どんなに自分が願って見ても、希望してみても、死の事実は変えようがない。死の事実は受けとめるしか仕方がない。死の苦しい事実を受け止めるのに、それを神の摂理とすることで「意味付け」しようとする。人間の能力を越えたものの意志によるのだとすることで、たとえ自分には納得できなくとも、大きな意志と計画があるとすることで、自分を納得させようとする。自己納得の為の追加的説明である。

(b)

「神の摂理」とすることで、絶対的力の介入が自分の人生にあることを認めさせようとする。抵抗できない大きな力がある。それは受け入れるしか仕方がない。人間は絶対的力には服従するしかしかたがないことを経験的に知ってい

る。洪水、台風、地震、暴風、竜巻、自然災害などを通して、その事を人類の歴史の中で学んできた。死という自然の流れを食い止めることは出来ないことを人間は知っている。「神の摂理」とは人間が服従するしかしかたがない「絶対的力」のシンボル（象徴）である。

(c)

「あの世」「神の摂理」などという言葉を使いながら、実はあまりその内容があきらかではない。つまりこれらの言葉は借り物であって西川喜作の実感の伴った言葉ではない。「あの世」は具体的に死後のいつ逝く所なのか。「あの世」には何があり、誰がそこにいるのか明らかではない。「あの世」という場合、西川が意味しているのは、死後に行くであろう「場、空間」があるとの予測だけである。また、「神の摂理」の「神」の概念が明らかにされていない。

「神の摂理」で西川が意味するのは、人間の能力を越えた存在者を想定しているだけで、神の「性質や本質」は明らかにされない。この問題（『あの世』『神の摂理』）を具体的、実質的に明らかに出来るのは「宗教」である。

『あの世』『神の摂理』への憧憬、願望、欲求は普遍的な人間の本質、願望、欲求であるから、これらのものへの応答は、「スピリチュアルケア」がなすことができる。しかし、「あの世」「神の摂理」の内容は宗教が応えるものである。宗教には多様性があるので、ケアは宗教によって異なる。

8 「一期一会」を求める生き方への変換

「発病後の人生は一期一会の日々を念じておりましたが、完璧には果たせなかったことをお詫びします。」（159）

その日、その時を最後の時として生きる。悔いのないように全精力を尽くして生きる。

西川喜作の生き方は正に一期一会の日々であった。

[30] 夜の恐怖体験

三月二十六日の日記

「夜が恐ろしい。寝ると背中が痛みだすのだ。昼間仕事をしているときには

危機体験とスピリチュアリティ

痛みはない。気が紛れているせいかもしれない。できるだけ仕事をしよう。」

(174)

夜はしばしば患者を苦しめる。死の不安や恐怖が襲ってきて、気を紛らわせることができない。襲い来る死の恐怖、不安を紛らわし、心の平静、落ち着き、自分自身を取り戻すには、朝が待ち遠しい。

夜は虚無を象徴している。すべてのものが行動を止め、人との触れ合いが絶え、限りない無の世界を「夜」は象徴している。その意味で夜を恐れることは人間が無限の無を意識していることであり、人間が無限を意識するという意味で、人間は「スピリチュアルな存在」であることの証である。この事実はスピリチュアリティが「プラス」と「マイナス」の方向をもっていることを示している。プラスは「安心」、「平安」「喜び」に繋がるものであり、反対にマイナスは恐怖、不安、苛立ちに繋がるものである。

[31] 残された生命への挑戦

「秋の学会に出題するかどうか悩む。出題するとすれば『精神障害者の長期在院と社会復帰』というシンポジウムに、我が精神科の入院患者がきわめて在院期間が短いことを調査して報告し、短期在院の理由と今日の国立病院が持つ悩みを報告してみようと考えている。しかしこの研究を六カ月間とすると、いま書こうとしている医学のなかの死の問題について考え、それを論文にまとめるだけの時間と体力が残らないのではないか。医学の中の死、つまり『死の医学』は今の私にとっては最優先の研究課題である。」 (175)

西川喜作は秋の学会報告をしたい気持ちが強い。精神科医として研究発表は重要である。しかし、今、ガンに冒されてみて新しい課題を発見した。「死の医学」の構築が責任課題である。どちらを重視すべきか。死に直面した患者の多くは、「捨てる」ことを学ぶ。「獲得」できない状況に置かれて、むしろ「捨てる」「失う」「後退」を経験しながら生きることを学ばなくてはならない。

この「捨てる」「失う」「後退」を経験することで、逆に自己の中に残されたものを発見しようとする欲求が引き出されてくる。自己の中に残された可能

性を見つけ出すことが「自己への関心」を強めていく。残された人生の意味、目的への探究が「スピリチュアリティ」の一つの要因であるが、もう一つは、自己の中に隠された可能性を発見しようとする傾向、願望も「スピリチュアリティ」のもう一つの側面である。

[32] 極度の絶望感

三月三十一日の日記

「もういい加減にしてくれ。おれはどうなってもいい。診察？ ご免だ。これ以上あだとか、こうだとか検査されたくない。脊椎や足の骨にガンがあったからといって切り取れるものではない。抗ガン剤？二度と考えたくもない。痛みがこれ以上強まるなら麻薬でも処方してもらうしかあるまい。……転移だと思ふ気持とそうでないと思ふ気持。この二つの相反する考えが頭のなかで激しく揺れ動いている。」（176）

投げやり、自暴自棄の様子が見える。診察、検査、抗癌剤投与が続けられ、苦しみに耐えてきた。症状が改善するものと期待していた。結果はむしろ悪化しており、この事実を知ったとき西川喜作の心は動揺し、怒り、絶望した。今までの努力が報われず、結果が悪い方にすすんでいる。医学、医療への失望と同時に自暴自棄に陥った。

この様な医学への絶望や自分の努力が裏切られた経験は西川喜作の中で、この地上のものに期待をかけないという決心を与えたに違いない。「期待断念感」が他の世界への期待を広げさせる動因となった。人間の能力、知性、理性を越えたものへの関心、期待、希望を持ったという意味で「スピリチュアリティ」の覚醒といえる。

[33] 入信を考える

四月二十三日の日記

「あの退院騒動から、もう一年半が過ぎた。あの頃のことを思いだすと感無量だ。斧医師はカトリック信者である。穏やかで強くしかも心優しい。信仰

危機体験とスピリチュアリティ

がそうさせているのだろうか。この頃、私もふと入信しようかと思うことがある。」（182）

精神的苦痛は激しく、苛立ち、焦燥感、孤独、死の恐怖は、西川喜作の自尊心を傷つけ、妻との信頼関係を危機状況に陥れていた。焦れば焦る程状況は良くならず、自分の力の限界を感じていた。すでに精神科医の自分の能力を越えていた。そんな状況の中で斧医師の存在は、西川の持たないものを持っているように思えた。それは信仰からくる力であり、「穏やかさ」、「強さ」、「心優しさ」である。西川は信仰でそれが得られるならば、入信しようかと考えたようである。

ここには明確に「私もふと入信しようかと思うことがある」と述べて、キリスト教への入信を真剣に考えた跡がある。「スピリチュアリティ」に視点をおいて見るならば、ここで「入信しようか」ということは、入信が与える安心感、生命力を得たいと言うことであり、かつ喪失した自尊心を回復したいという期待からくるものである。西川喜作がもとめていたのは、信仰者である斧医師がもっている「穏やかさ」「強さ」「心優しさ」であって、それは入信にかかっていると考えた。病むものは人の優しさ、心使いに非常に敏感になる傾向が強くと見られる。この感性は目に見えない世界（人々の心の動き、自然の移り変わり、人生の生き方、人生の背後の動きなど）への関心を深くするもので、「スピリチュアリティ」の覚醒に寄与するものである。

[34] 人の思いやりに感動

五月二十九日の日記

「あるところまでくるとビッリと痛みが走った。『レントゲンを撮りましょう。写真は厭だろうから、見せないですよ』院長の思いやりが嬉しかった。」（189）

病むものへの心使いに大層喜んでいる。痛んでいる心、自分でも持て余している自分、そんな自分への優しさや心使いに敏感に反応している。このような感動の背後には、病人がもつ自己喪失感、自己無力感、自己無価値観、遺棄感

などによる自己への徹底した絶望がある。その絶望を味わっている自分を放棄せずに見守っているもう一人の自分がある。人の思いやりや優しさや労りは自己放棄せずに頑張りつづけている自己を慰め、励ましてくれる。それは失いかげ、絶望しかけている自己を元の自分に引き戻す力となるものである。

[35] 人の痛み、生き方への感性

六月一日の日記

「何にも知らなかった。こんなに美しい顔立ちと優雅な立ち居振舞いをする女性がまさか乳房を失っているなど想像もしなかった。それに比べて私はガンであることをむしろ人に教え知らせている。そっと隠しておくべきではなかったのか。なんと慎ましさに欠けた、大仰で軽率な自分だろうか。私はNさんのそばにいるのが恥ずかしかった」(190)

病を負った人や痛みを経験している人は、人の痛みに敏感になっている。その敏感さに加えて、その病や痛みを負いつつ人はどう生きているのかにも深い関心をもっている。そこには、他者の苦難や痛みを重ね合わせることで、苦難や苦痛の中で生きる道を模索しているといえる。

Nさんが苦しみの経験をしたことを知って西川喜作は感銘を受ける。Nさんを尊敬の目で見直す。自分が「恥ずかしかった」を告白させるほどにNさんの生き方が崇高に見え、死を見つめながら生きる西川喜作の生きる励みとなったに違いない。西川喜作は自分が「大仰で軽率な自分」と言い、「Nさんのそばにいるのが恥ずしかった」と告白している。自分の苦痛を口に出し、人に伝えることでしか苦痛に耐えられない自分が軽卒に見えた。そんな自分に比べて、Nさんは慎ましく耐えている。その訳はどこにあのか。Nさんを支えている目に見えない何物かに、西川喜作は関心を示している。

[36] 仕事こそ存在証明

六月三日の日記

「M医師の言葉を信じよう。痛みさえなくなれば夜も眠れる。本も読める。書きかけの随筆も論文も書ける。患者も私を待っているのだ。それに出版を

危機体験とスピリチュアリティ

決意した原稿も書き続けられる。(192)

精神科医として仕事を続けることに西川は生きる意味を見つけている。「熟睡」、「読書」、「執筆」、「診察」もすべて精神科医としての西川喜作の「存在証明」を実現させるものである。

八月十八日の日記

「私にとっては延命のためではない。片目になってもいい、生きている限り、精神科医として仕事をしたい。残された命を精一杯燃し続けたい。」(217)

精神科医としての仕事に固く執着しているが、「生きがい」であり、かつ「存在証明」だからである。仕事に没頭することで苦痛を一時的に忘れさせてくれる。また失いかけた自分の存在の意味を回復する方法でもある。精神科医として患者を診察し患者に奉仕することによって使命に生きる自分を回復することが出来る。更に、仕事が西川喜作が生きたことを証する「存在証明」になるものだからである。この様な「生きる使命」や「生きる存在証明」は自分の究極的人生を問うことから来るものであり「スピリチュアリティ」に関わるものである。

[37] 感謝されることへの感激

八月十日の日記

「家に戻るとスリランカから手紙が届いていた。スリランカの小さい村の小学校の校長先生をしているスサンタ・シリワーデナ氏からのものだ。……日本人と言葉をかわしたのは初めてだったし、まさかあのような本を送ってもらえるとは想像もできなかつたと感激してくれている。私は自分のできる範囲のことをしたにすぎない。私の収入からすればその本の価値もごく僅かである。……私の人生のなかで文を交換しあった外国人はおそらく百人を下るまい。その半数近くは十年、二十年たったいまでも心を通わせ、便りを交換し合っている。この人々は私にとっては貴重な宝である。」(205)

スリランカの小さな小学校長からの感謝の手紙は、西川を感激させ、喜ばせた。自分の小さな行為が貧しいスリランカの校長先生をこれほど喜ばせた結果になったことで、特別の喜びを西川に与えた。病気の為に精神科医としても、社会人としても、家庭人としても、十分な働きが出来なくなっている悲哀と苦悩を切実に経験しているとき、外国人から感謝状が届いたことは、西川の存在を大きく慰め励ました。この様な友人がいることは「私にとって貴重な宝である」と言わしめている。「生きていることの意味」を再確認させてくれた出来事となった。この出来事は「生きていることの意味」を与えたという意味で「スピリチュアル」な出来事となった。

[38] 死は救い

八月十四日の日記

「発汗は依然やまない。呼吸困難と背部の痛み、腰痛まで出てくる。死んでしまいたい。薬を大量に飲んで死んでしまいたい。死はいまの私にとっては確実な救いだ」(213)

ガンは確かに進行して肉体的苦痛は身体を苦しめている。それに加えて、仕事の継続が困難になり、苛立ちが多くなり、病院のスタッフに迷惑をかけることも多くなってきている。武蔵野病院、ナイトクリニック、ナイトホスピタルの勤務を諦めるしかなくなっている。精神科医としての存在が果たせないことへの苦悩が見える。いっそう死んでしまいたいと願っている。

ここにも精神科医としての仕事がいかに西川喜作を支えていたかが見える。襲ってくる肉体的苦痛、仕事の継続を妨げているガン、最先端医学も苦痛を緩和できない現実、正に救いは死以外にはない。もし人間の能力や知性を越えたものや人生の意味や価値を仕事や自己の意識以外にもとめることが出来たら、そこに新しい生きる可能性を見出せたのではないか。人は人間を超えたものからの解答や存在の究極の意味を求めているものである。それが人間は「スピリチュアルなもの」という理由である。

【IV】結 果

(A) スピリチュアリティの動因

西川喜作のケースの中に見られる心理的傾向を揚げると、上記の様に多様な傾向をみることが出来る。進んで、ここではこれらの傾向を作り出している内的原因に注目して見たい。死に直面した患者の心の傾向の背後には人生の危機状況の中で特に顕著にみられる心理的現象はないだろうか。人生の危機は人間の平常時とは異なる心の状態を作りだし、それが結果的に「スピリチュアルなもの」への関心を増大させるのではないかと考えられる。以下そのことを述べる。

(1) 感受性の高揚

患者は平常時よりも敏感になり感性で生きるところが多くなる。普段、人は日常的事柄に追われ、一つ一つ感じて生きることは無く、むしろ、無感覚で生きることの方が多い。しかし、患者は病気から来る肉体的苦痛に悩まされるし、時間的にゆっくりした中で、回りの出来事を感覚的に受け止めることが多くなる。すると、肉体的変化や医師の言葉や回りの人々の会話や行動、生き方などや自然の移り変わりなどに敏感に反応し始める。更に、日常は殆ど無視されてきた超自然的出来事などにも敏感になっていく。特に苦難、苦痛の襲ってくる中で、人々の生を支えている生きる意味や目的などへの関心が鋭敏になり、鋭く思案、熟考する傾向が見える。このような傾向が超自然的な事柄や超越的存在への関心を深めさせる動因になっている。

感受性が鋭敏になることは、同じように痛みを負いながら懸命に人生を生き、全うした人たちの「生き様」、「死に方」、「価値観」、「人生観」などにも鋭敏な関心を示すようになる。健康な時には自分の生活に充実感をもっているが、病に倒れ、死に直面すると、苦難を生きるための支えとして人生の目的や意味への深い関心を深めていくと考えることができる。

(2) 関心の収斂化

西川喜作は自然、絵画、音楽、映画などに関心が深く、時間を造っては出かけたようである。しかし、映画「エーゲ海にささぐ」を見た時には、殆ど心に感動させるものが無かった。西川は幾つか美しい場面もあったがと述べ、「今の自分にとっては」と述べているが、これは関心が病気に関することや病気の中で勇敢に生きている人々の「生き様」や病人を思いやる人々の「親切」や「優しさ」などに関心が収斂している事を示している。

(3) 感情、情緒の無制御化

自分で自分の感情のコントロールが効かない状況にある。無性に怒りが込み上げてきたり、愛しているのに不平不満を言ったり、甘えたり、拒否したり、怒りや恐怖の感情が自分の理性や知性や意志でコントロールできる範囲を越えてしまう。その結果は、他人を傷付けてしまう自責の念、自分が自分でなくなる自信喪失、回復の見込みのない予後などは深刻な自己葛藤や絶望感を生み、深刻な自信喪失や自尊心の喪失を生んでいる。新しい生きる可能性として人間の能力や知性を越えたものへの関心を深めさせる動因となる。自分の感情や情緒の無制御化の体験は、患者の中に「スピリチュアルなもの」への希求を増大させる原因となっている。

(4) 依頼心、依存心の増大

苛立ち、不安になる自己をコントロールしようとしながら出来ない自己を体験しながら、自己の能力の限界を痛感する。感情の揺れ動きの激しさが見える。立派な精神科医としての自尊心が崩れているのが分かる。健康で精神的に安定したときの自分に戻りたいという願望は強い。この願望を実現させるには、自分の外のあるものに頼ることを考える。目に見えないが存在するかもしれない超越者に依存しようとする。それによって自己の失ったものを取り戻そうとする。このような傾向は、人間存在を越えたもの「超自然、超人間的なもの」への依存の希求と繋がっていく。そこに「スピリチュアリティ」がある。

危機体験とスピリチュアリティ

(5) 現実逃避

現実の厳しさに直面して人は現実から逃避しようとする。現実から目をそらすことも回避の一つである。「仕事への没頭」も現実回避の方法である。患者は、自分の置かれた現実の厳しさを見つめるよりも、むしろそれまでの仕事の継続を求める。それは残された人生の積極的生き方であるが、別の見方からすると「仕事への逃避」である。結果として、「仕事への没頭」が社会的積極的意味合いが強いが、そこにある心理的働きは「現実逃避」である。

以上のことから分かる通り、人間が危機状況に置かれると、自己の現実から逃避しようとすることは自然なことである。自己保存の欲求といえる。自己を越えたものとの関係を持つことで、現実回避することがあっても良い。患者の多くは過去の楽しかった経験を思い起こしながら厳しい現実を避けて空想の世界に逃避する。危機状況は人々を心理的に保護する作用として逃避という方法をとらせる。そして超自然的なものへの逃避を「スピリチュアリティ」と呼ぶことができる。

(6) 親切への柔軟性

西川喜作のケースから明らかなように、危機状況に置かれると、人は自己を支えるものを必要とする。死という危機は人生の全体を破壊するものである。それまで築いた名声、経済的安定、社会的地位、人間関係、将来の希望もすべては過ぎ去ってしまう。それは自己自身への失望、絶望をもたらし、残された将来の時間への生きる意欲を失わせるものである。患者は人の親切、好意、優しさ、思いやり、心使い、労りに非常に敏感に反応する。それらを異常に有難く、嬉しい事として受け取る。西川のケースを見ると西川が担当医の一言に感激したり、斧医師の優しさに心動かされて、キリスト教への入信を考えたりしている。これらの「親切」、「優しさ」などへの願望、希求の延長線上に、さらに人間を越えたもののもつ恩恵、慈悲、愛、配慮、生命への希求が存在すると思える。つまり、自信を失った自己、社会的に無価値になった自己、恩返しができない自己に直面させられて悩み苦しむ。しかし、自分の身に期待も願い

ももたないというのではない。自分自身への執着はむしろ大きくなる。そこで人が与えてくれる親切、好意、優しさ、労りを「支え」にして自己を取り戻そうとする。この世のものは、有限性、限界性というものが付きまとっているのので、この有限性や限界性を越えたところに、確かな恩恵、慈悲、愛、生命を求めることが、「スピリチュアリティ」であるといえる。

(7) 自己存在の意味付け

患者は死の不安や恐怖に苛まれ、体力や気力の衰えで自分の存在の意義を見つけにくくなる。回復の見込みがない現実には人から看護されることさえ心の負担を増すことになる。存在する意義とは、生きるに値する生命かどうかを問うことであり、また生きる意味合いがあるかを問うことである。社会的生産性や人間らしさを失った者に、生きる意義を認めることは困難が多い。人間固有の価値を認めようとする現代社会の現実にはしばしば患者を苦しめる。人の世話にならねばならない自分にもなお人間固有の価値を認めることの出来る患者は多くない。しかし、患者は葛藤しながら、人間存在の外側からの意味付けを探そうとする。社会的能力や生産能力を失った患者が社会的な「意味付け」は見つけにくい。そこで人間存在以外の世界からの意味付けを求め始める。そこに「スピリチュアリティ」が生まれる理由がある。

(8) 自己存在の有意味化

死に直面した人ほど生への執着を示す。「死にたくない」と叫ぶのも、「もう一年命があればいい」と切望するのも、「もっと仕事がしたい」と仕事に集中するのも、「生への執着」の形である。生に執着すれば、死後に自分の生きていたことを残して置きたいと望む。自分の生きた証明をして、「仕事」、「手紙」、「診察」などしようとする。そこにあるのは「自己存在の有意味化」である。

危機体験とスピリチュアリティ

(B) 日本的スピリチュアリティ

1 「スピリチュアリティ」の現れ

「自然との再会」「自然の美の感動」「同病者への共感」「宗教的言語（死の解脱、あの世、神の摂理など）の使用」「宗教者、信仰者への言及」「勇敢な生き様への感動」「過去の振り返り」「魂の故郷の再訪」「死後の準備」「『今の私』の視点」「自分の愚かさへの後悔」「自分の脆さの発見」「残された可能性への挑戦」「極度の絶望感」「自分の生へのいとおしさ」「死を求める」「生きがいの求道」「人生への感謝」「依頼心、依存心」などの中に、「人間を越えたもの」への興味、関心、求道、追及、願望、切望などが見られる。また同時に、人生の意味や目的や価値などの追及も見られる。患者のスピリチュアリティなものへの「現われ方」の程度は病状の進行状況で異なる。

2 「スピリチュアリティ」の本質

このケースを見ると、「スピリチュアリティ」は一つの「働き」、「機能」である。その「働き」、「機能」の役割は危機状況の中で自己を見失い、生きる意味や目的を失い、自己崩壊し、心の動揺、痛み、分裂をおこしている患者に新しい視点を与え、新しい生きる意欲と勇気や希望を与えるものである。「スピリチュアリティ」は常時表面化しているわけではない。むしろ、健康ですべての事が順調に運んでいる時には、むしろ隠れて表面化しない。その意味でスピリチュアリティは「人間の生と死」のような「生の危機」において特に触発され、覚醒されて表面化するのである。危機状況で超越者への関心、希求が強くなる。超越的、絶対的なものへの積極的関心が、結果として平安、確信、安心、喜び、希望、感謝などを与えることになる。

3 「スピリチュアリティ」の特徴

スピリチュアリティは特殊な資質ではなく、むしろ人間に普遍的に与えられているものである。宗教に関心がなく、信仰心のない人にも潜在的にあるものである。生命が危機に曝される「危機状況」では、普段は隠れている「スピリ

「スピリチュアリティ」が覚醒されて、患者の魂を慰め、励まし、希望を持たせてくれる。「スピリチュアリティ」は宗教とは異なる。宗教には宗教的選択がなされて入信するが、「スピリチュアリティ」は決断、選択がなく、どこまでも興味、関心、希求、願望のレベルに留まる。

4 「スピリチュアリティ」の果実

「スピリチュアリティ」へのケアが十分なされると、人間の究極的不安、恐怖が取り除かれて、ある一定の満足、充足を得て一定の安定状態を得る。下記のようなものが考えられる。

「自己の回復」「生きる勇気、意欲、希望の獲得」「苦難の中での生きる慰め」「自己変革」「執着からの解放」「自己受容」「他人への優しさ」「生きる希望」「生きる勇気」「苦難の人生への新しい視点」「自己確認」「人生への素直さ」などである。

5 「スピリチュアリティ」の意味

以上のように「スピリチュアリティ」は人間が危機状況に置かれたときに、自己喪失、自己崩壊から自己を守り、本来の「自己」を回復させ、成長させ、苦難の中で希望を見つけ出すように働くことが多い。「スピリチュアリティ」は超越的、絶対的なものへの関心であり、人間の究極的生きる意味や目的であるから、危機状況に直面しながら人は新たな人生に目が開かれながら、より人間的、倫理的、社会的に高次元の生活を始めることができる。

【V】むすび

1

死に直面した患者の心の問題の所在が明らかになってきた。

死に直面して人は懸命に自分の生に執着する。自分の仕事に熱中することも、手紙を書き続けることも、滅んでいく自己存在を意識しているからの事である。そして、社会的生産能力を失い、人間的にも弱さを露呈した自己を抱えながら、

危機体験とスピリチュアリティ

なんとか自己であり続けたいと願望する。この世の価値観や人間観に慰め、励まし、希望を求めるのではなしに、むしろ、人間の限界を越えた超越者、絶対者から見た人間観、価値観に生きる道や希望を求めようとする。

2

すでに見たように感性の鋭敏化、収斂化など全てがスピリチュアリティを触発、覚醒する動因となっている。更に、同じ病を持つ人の闘病の姿に感銘したり、人の親切や好意に普通以上に感動するのも、人生の意味を失いかけていることが原因である。死と直面しながら厳しい生命を生きた人々の勇気、忍耐、希望の根拠を知りたいと願う。単なる激励には、死の直面した苦痛や苦悩にある自分を慰めることができないことをすでに十分経験している。肉体的苦痛や精神的苦痛に耐えて、尚、自分らしく生き抜く内的力、意欲、意志、願望、希望を必要としている。自分の生命の究極的意味や目的への探究がそこから始まっていく。

3

ヴィクトル・フランクルが「夜と霧」の中でコペルニクスの転回と言ったことが、死に直面した人たちにも当てはまる。「ここで必要なのは生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれは期待できるかが問題なのではなく、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。」V. フランクルは自分を越えたものが自分に何を問うているのかを知ることが危機状況で生きる力（生命）であると述べている。しばしば、危機状況に追い込まれると、人間存在を越えた超越者や絶対者に生きる力や希望を求めるである。これがスピリチュアリティである。

4

日本人が超越的なものを求めるとき、必ずしもキリスト教的な神概念のような明確なものを求めている。ただ漠然とした大きな力や生命や愛として存在し

ている。人間とは異なる能力と特性を持った存在者として理解している。人格神というよりも無人格である。病気で弱った自分の依存の対象をして存在している様に思える。対等に対話するよりも、依存し、甘える母親イメージが強い。自信喪失に陥り、自暴自棄に襲われ、自己統制が出来なくなった自己に生きる希望を与えてくれる者として母性的超越者をイメージしている。

5

そこでは倫理的問題が殆ど問題になっていない様に見える。絶対者が確固とした倫理的水準をもっていることがない。患者は超越者、絶対者を正しい方、絶対真理、絶対愛の方と漠然と信じている。

「正しさ」「公平さ」「優しさ」「思いやり」は、人間が絶対者に期待している特性である。その点で、日本人のもつ「スピリチュアリティ」は絶対者、超越者に無限大の寛大さ、慈悲、愛、を求めている点が強い。対象である絶対者が人間に絶対的的正しさを求める傾向は少ない。

危機体験とスピリチュアリティ

【注】

- (1) Howard W.Stone, *Crisis Counseling*, Fortress Press, 五島勝訳「危機におけるカウンセリング」聖文舎
- (2) E.Kubler-Ross, *On Death and Dying*, 1969, 川口正吉訳「死ぬ瞬間」読売新聞社. キュブラー・ロスはこの本のなかで、大変有名になった死の受容の5段階を発表した。すなわち、拒否、怒り、取り引き、抑鬱、受容である。その後多くの研究者が同じような研究を発表している。例えば、Y.Spiegel は *The Grief Process*(1977) で4つの段階を示している。すなわち、ショック、統制、後退、適応。また D.K.Switzer は6つの段階を示している。ショック、無感動、夢と現実との葛藤、悲嘆の直体験、選択時記憶と苦痛、喪失の受容と人生の肯定
- (3) Erick Lindemann については H.J.Parad の編集した *Crisis Intervention; Selected Readings*, 1965, p.21 を参照のこと。
- (4) Carl Michaelson, *Faith for Personal Crises*, 1958
- (5) C.V.Gerkin Hunter, ed. *Dictionary of Pastoral Care and Counseling*, Arbington Press, 1990. pp.247-8
- (6) *op. cit.*, p.249
- (7) The Spiritual Care Work Group of the International Work Group on Death, Dying and Bereavement, Kenneth J Doka with John D Morgan, “Death and Spirituality”, Baywood Publishing Company, Inc. New York, 1993 p.11
- (8) *op. cit.*, pp.11-12
- (9) *op. cit.*, p.12
- (10) John D.Morgan, “The Existential Quest for Meaning”, Kenneth J Doka with John D Morgan, *Death and Spirituality*, Baywood Publishing Company Inc. New York, 1993 p.6
- (11) *op. cit.*, p.8
- (12) Dennis Klass, “Spiritual Aspects of the Resolution of Grief” p.245

- (13) Dennis Klass, "Spirituality, Protestantism and Death", Kenneth J Doka with John D Morgan, Death and Spirituality, Baywood Publishing Company, Inc. New York, 1993 p.11 p.59
- (14) op. cit. p.51
- (15) op. cit. p.52
- (16) Richard B.Gilbert, "Spirituality, Course, Journey, Experience", Connections, IN
- (17) 窪寺俊之「スピリチュアルペインを見分ける法」「ターミナルケア」Vol.6, No.3, 5月号、三和書店、1996年 pp.192-198
- (18) George Fitchett, Spritual Assessment in Pastoral Care: A Guide to Selected Resources, Journal of Pastoral Care Publications, Inc., Georgia, 1993
- (19) Richard B.Gilbert. op. cit. 1.3.
- (20) op. cit. 1.3
- (21) Bernard Spilka, John D.Spangler, and Constance B.Nelson, "Spiritual Support in Life Threatening Illness" Journal of Religion and Health (1983), 22(2), 89-104
- (22) op. cit. p.90
- (23) op. cit. p.90
- (24) 窪寺俊之 op. cit.,